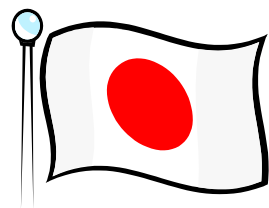


フェローシップ・ニュース

47

近藤恒夫がアジ研で講演！ (国連アジア極東犯罪防止研修所) 「薬物依存を有する犯罪者の処遇について」

今年の2月に引き続き、5月23日アジ研（国連アジア極東犯罪防止研修所）において第148回国際研修（矯正保護）が開催され、その講師として近藤恒夫が招かれました。研修参加者は、発展途上国等から刑事司法実務家約10名、国内実務家（刑務官、保護観察官、検事、裁判官等）約10名と、近隣の関連施設職員等数名でした。



近藤恒夫の講演より抜粋

日本の裁判はありきたりで、やらなくてもだいたい結果がわかっている。裁判官は判決のときになぜ具体的にリハビリの方針を示してくれないのか？ 裁判という特殊な場所なので本人も緊張していて何を言っているのかわからない。ちゃんと聞こえてくるのはクスリを止めて1～2ヶ月たったくらい。裁判中は後遺障害が残っている可能性が高いから、その中で判決文を読まれるだけだと頭に入ってこない。もし具体的に示したら、NAなどに行く交通費を国が出さないといけないうちで言えないのではないかと。僕の裁判長だった奥田保先生（現在アパリ監事で弁護士）は、具体的にAAのリストを配ってくれたし、「精神科に週に1度行って治療しなさい。保護観察所には月に1度行きなさい。ロイ神父の指導を仰ぎなさい。」と具体的な指示があった。これがとても役に立った。なぜそう思ったか。僕は裁判中に蛍光灯の音がうるさくて仕方がなかった。あとであれば幻聴だったと気づいた。その具体的な指示がなかったら実行できなかったし、ダルクもできていなかった。

この講演を聞いていた日本の裁判官からのコメント

具体的に指示を出せないのは、交通費を出すとかそういう問題でなく、言える立場にあるのだが、理解がないので言えない。裁判のときには被告人はみな正常になっていると思っていた。私たちはもっと勉強しなければいけない。

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2011年7月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。
全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

近藤がアジ研で講演！	1
JICA & APARIイノベーションプロジェクト報告	2
第7回 DARS「女子矯正施設の現場から」…住谷喜久乃氏	3
薬物依存症と家族の対応について…町田政明	5
入寮者からのメッセージ…ミッチャン	6
学会のご案内 リカバリー・パレードのご案内	7
アパリからのお知らせ	8

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告

第5回派遣(2011/5/9~15)

アパリは、平成21年度よりJICA(国際協力機構)の草の根技術協力事業として、フィリピン、マニラ市の貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業を展開しています。本事業により、5月9日から7日間、日本のメンバー3名(三浦、山本、古藤)がフィリピンに行ってきました。

<第5回渡航スケジュール>

5/10(火):ファミリー・ウェルネス・センターにて打合せ
JICAフィリピン事務所にて現地NGOと会合

5/11(水):ビジネスミーティング

5/12(木):タタロンのARMミーティング視察

5/13(金)午前:保健省にて会合
午後:JICAフィリピン事務所にて打合せ

5/14(土):教会Hope for the World訪問

この事業は、フィリピンで薬物依存の回復プログラムを提供しているFWC(ファミリー・ウェルネス・センター)というNGOと協働で実施しています。中心的な活動は、マニラの貧困地域でミーティングを定期的に行うことと、その運営のための人材育成です。現在、マニラ首都圏のタタロンという地域で、月に2回ほど、ARM(アディクション・リカバリー・ミーティング)という名前のミーティングを行っています。実際にこのARMを運営しているのは、フィリピンの5人のコアメンバーたちなのですが、コアメンバーたちも回復者なのです。

今回の訪問の主な目的は、昨年からはじまったARMのフォローアップと、現地スタッフたちとの意見交換、そして、フィリピンの行政機関・NGOとのネットワークの構築です。フィリピン側のプロジェクト・マネージャーであるFWCのリッチー氏をはじめ、他のスタッフやコアメンバーたちと久しぶりに会い、ARMについて、そしてこれからどのように普及させていくことができるか、滞在を通していろいろと話しを深めることができました。また、ARMを実施しているタタロンのNGOスタッフやARMの参加者との再会、他の地域のNGOや現地のJICA、保健省ともミーティングをして、貴重な意見を頂戴しました。さらにJICAを通して、マニラのストリートチルドレンをサポートしているICANという日本の団体の現地スタッフの方々とお会いし、ネットワークを広げることもできました。

このプロジェクトもついに最終年度を迎えました。今年は、今後どのように発展させていくことができるか検討しながら進めていく1年となります。

新刊本のご案内

ニッポンの(薬物)依存

ついに近藤恒夫とデーブ・スペクターの対談本が発売されました！
特に教育関係者、司法関係者の方にはお勧めです！



4月27日発売
定価：1,680円(税込)
発行：生活文化出版
全国の書店でお買い求めください！
アマゾンでも購入できます！



JICAフィリピン事務所にてアパリの活動をプレゼン



FWCにてビジネスミーティング



ICANの現地スタッフと交流を深めました



教会Hope for the Worldを訪問しました



フィリピン保健省での会合の様子



タタロンでのARMの様子

龍谷大学・矯正保護総合センター 主催

第7回 薬物依存症者回復支援セミナー DARS IN 札幌 より

「女子矯正施設の現場から」

札幌マック女性共同作業所 住谷喜久乃氏

矯正施設も含めて、薬物関係の方々においては、札幌マックが薬物依存症者を受け入れているという知名度の低さに驚いています。私が保護観察所と関わりを持つようになってそのことを一番訴えたかったのです。特に女性の薬物依存症者は北海道では行くところが無いのです。札幌マック女性共同作業所で薬物依存症者を受け入れていることをアピールしたかったのです。女性の依存症者、は「刑務所の中だけしか居場所が無いのではない」、それを訴えたかったのです。今から数年前、未成年の子が別の施設からマックに入所してきました。その時に未成年ということもあり、保護観察中でした。「これはいいチャンス」と思い、とにかく司法に働きかけようと保護観察官を通して札幌マック女性共同作業所のパンフレットを保護観察官に預けてきました。

札幌女性刑務所に行ったらとにかくこのパンフレットを職員の方々にばらまいて下さいと。「生きる方法があるよ、薬を使っても使わなくても刑務所だけではなくて、他に生きる場所があるよ」と伝えていくのは私の切なる思いでした。

それをやって約1年後、今でも鮮明に覚えています。札幌刑務支所の職員の女性が二人来て、ミーティングの見学、私と個人的に話などをしました。マックスタッフを中心に仲間達は普段通りのミーティングをし職員からの質問に答え無事に終わることが出来ました。それから何日か後に支所の方で講演をして欲しいとの依頼があり、ブルーの制服着た50人～60人の職員の前で私が当事者であること、薬物依存症は病気なので回復することができる、回復とはどのようなプロセスを通るのかを伝えてきました。その後監獄法が変わって、薬物矯正教育が始まり1年間12単元あります。そのうち3単元を使って当事者によるグループセラピーを受け持って下さい、とのことで始まりました。ダルクがとても浸透しているなど感じます。私をダルクの職員だと思っている人も未だにいます。マックでもダルクでもいいです。依存症者が生きていける場所があれば、どこでもいいから繋がって私達と一緒に生きていこう、私の所属や名前なんて覚えなくていいから、女性のための施設が札幌にあるということを知って欲しいそうやって始まりました。札幌マックの施設でやっている事と同じような形でグループセラピーをやります。対面ではなく椅子を円形にして、私もその中の一人になってのミーティングです。

続けていく中で、刑務支所のほうは30代～40代で子供がいる人がほとんどでよく話してくれます。刑務支所で作成したワークシートに沿って一回目のテーマは「薬物を始めたきっかけ」、二回目のテーマは「周りにどんな迷惑をかけたのか」「その中で自分はどのような状態であったか」、三回目のテーマは「今後薬物を使用しないで生きていくにはどうしたらいいのか？」このテーマでほぼ全員、売人の夫の所に帰るとか子どもと一緒に暮らすとか、刑務所に入る前の環境に戻って行くと言います。これには吃驚なのですがその前にマックに来てみませんかと声をかけてみます。

ミーティングでの分かち合いは喜ばれます。行くたびにアンケートを読ませてもらいますけれど、「自分だけじゃないという事が分かった」「なんか先が見えそうだと変わってくるんですね。刑務官や専門家の方々も薬物矯正教育の単元の中には講師として入っています。当事者が一方的に聞く形では、一人ひとりの感情の中、思いの中までその言葉が入っていくことは少ないと実感します。私はただ分かち合いのお手伝いをしているだけで、自分が薬物・アルコールにどっぷり浸かっている時の状態、それから今の状態をありのままに伝えてきます。少しでも一人一人のありのままの話を引き出す。そういうところに重点を置きます。そうするとだんだん共感を得て、少しだけれど希望でも見えてくるのでしょ。

さっきから「旬」「旬」と耳に入りますが、何が「旬」で何が「旬」じゃないのか、私は少年院の中にも入っていますが、日々の仕事の中で、薬物を使っている時はああだ、こうだということではなく、今日一日の生き方の中で「旬」の経験が多いです。私の場合、薬物・アルコールを切って、二年後に再婚し、一年後に子どもを産んで、子育てし、病気の真ただ中で育てた子供が不登校になったり、その後も母親の問題。ステップで言うとステップ8、9の「埋め合わせ」ですよね。自分がいかに当たり前のことを、当たり前の事として受け入れ生きて来なかったというのが実感です。これらの事を軌道修正しながら日々生きている訳です。毎日が新しい発見の連続です。そういう意味で私はいつも「旬」です。つい最近も娘夫婦一家が病んでいまして、一人は精神病院に入院してともろもろあります。孫からみれば、ばあちゃんとして、母からみれば娘として、夫からみれば妻として、娘からみれば母として、また所長としての自分その五役を今日1日の中で今日1日分できるだけやっていく、その事は私にとって今日1日が「旬」。

過去の病気の事も含めて、ありのままの自分を矯正施設の中に置いてきます。ただ実感するのは、刑務支所のほうは出所してくる方との繋がりがスムーズにいきません。個々の施設で違うのかもしいけれど、札幌刑務支所は矯正教育の講師をやってる者は個人的に受刑者との面会はだめです。手紙のやり取りも禁止されています。

DARS (Drug Addiction Recovery Support) とは、

2009年5月31日に東京の御茶ノ水で開催されたある研究会に集まった12人の男女が、薬物依存症者の回復支援のための担い手を育成しようと立ち上がった集まりです。



NPO法人札幌マック
女性共同作業所
施設長 住谷喜久乃氏

DARSの講演(6/12)をテープ起こしたものです。

左記文章の中の「旬」とはこの前に講演した市川岳仁氏の話の中でテーマとなっていた言葉です。

書籍のご案内！

拘置所のタンポポ

日本ダルク代表
近藤恒夫 著

目次
プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
第6章 新生した仲間たち

アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

発売：双葉社
定価1,470円（税込）

増刷されました
全国の書店でお買い求めください！
アマゾンでも購入できます！

一度矯正教育の教官に話したのですが、「先生に迷惑がかかるので電話はするなと言っています」と。とんでもないです。「お願いですから、矯正教育を受けた人達には、出所したらマックに連絡するんだよ、困ったことがあったら相談に行くと声をかけて下さい」とお願いしてきます。後は保護観察所、地域定着支援センターからもお声がかかって受け入れるという事をしています。薬物事犯の人達が懲役で刑務所の中で生活するという事はその人の生きる力をなくしてしまうといことを実感します。マックに入所してくる人達は、刑務所の方が居心地いいという人が殆どです。

刑務所の中では私語を交わすな、コミュニケーションを取ると懲罰になる。マックに来るとコミュニケーション取れと言う。ここではだめ、こっちではやれと言われてもそう簡単にできるはずがないと。それはもっともです。やっぱり「ダメ絶対、これをやっちゃ！」ではないんです。批判するようで嫌ですが、泣けてきます。『刑務所のほうがいいかな、人と話さなくてもいいし、言われたことやっていけばいいし、薬も手に入らないし』ってこういう言い方をする。びっくりしますが薬を使っていない依存症者にとっては刑務所のほうが居心地いい、というのは解かる気がします。人に言われた事だけをやればいい、それがすごく楽なのです。そのところで石塚先生の提唱されているドラッグコートの中で薬を使わないで生きる方法を身に付けることが出来たらいいですね、塀の中ではなくて、ガチンガチンの法律に縛られるのではなくて、私たち薬物やアルコールにがんじがらめに縛られて、人間として生きる力が無くなったじゃないですか。それと一緒にです。

確かに塀の中は覚せい剤や他の薬物から解放されて自由です。でも、法律と塀の中と規則約束事のがんじがらめに縛られて、自分が誰で何であるかさえ見失っている状態です。特に女性の依存症者は「自分自身」を見失ってしまうんですね。この依存症という病気を発症していく中で。自己の確立なんてない。女性の依存症者は物質依存がひどくなればなるほど生きる力を失ってしまうので、人に対する依存も強くなる、特に男性に対する依存が強い。女性という武器を使えば男性は誰でも相手にしてくれるし、振り向いてくれるんですね。そういうことをずっと繰り返し、自分を見失っていくんですね。私たち女性の施設ではとにかく自分自身を取り戻そうと。失敗しようが何しようが、再使用しようが、再飲酒しようが、とにかくマックという共同体の中において「自分自身を取り戻そうよ、どんな自分でもいいから」という部分に重点を置いています。

刑務支所の方のこちらに対する配慮も理解できるんです。「迷惑でしょ」って。でも、私達は自分自身含めて、とんでもない人ばかり相手していますから全然迷惑じゃない。来てくれただけで「ここから始めよう」って。刑務所から来た、あっちから来た、こっちから来たなんて関係ないですよ。依存症という同じ病気を持っているという共通点あるだけでいいじゃないですか。でも、繋がらない。刑務所の方々だけではなくて、それがちょっと困ったもんだなあという感じです。

少年院のことも触れますが、さっき長谷川先生が囑託医をなさっていた紫明女子学院（女子少年院）に私も薬物矯正教育の講師として行ってます。自分の孫のような年代の人達の対応ということで悩んだのですが、とにかく未成年だろうが成人だろうが「本来の自分自身を取り戻そう」ということに協力できればと思い始めました。年が違っていきようがいまいが同じです。グループセラピーをやります円形に座り分かちあいます。出所・退院間近...だいたい半年後に控えている人と3回にわたり個人面談します。個人的に1対1で話をします。びっくりするのは、本人に病気という認識はないし、病気という言葉が嫌いです。眉間にしわを寄せます。薬物を使い続けた結果ここにいるというより、「運が悪かった、男をかばったんだよ」という感じです。病気の認識はなければいいです。今後どうするのか、ここの中において、日々何を感じて何を思いながら生活をしているのか、私自身が当事者ということもあって共感を感じてくれているのか少しずつ自分の生い立ちから、家庭環境、どういう風にして薬を始めたのか話してくれます。女性は特に被害体験が多いので、自分は訴える事が出来ても、なんでここに訴えられているのか、なぜ捕まってここにいなきゃいけないのかって。色々な状況からサバイバルするのに薬を使ってきたという思いは、未成年・成人かかわらず、強い思いでいます。

以前私は、薬物を使う言い訳だろうと思っていましたが、そうではなくて、一つの経験として、「じゃあ今度は薬を使わないで乗り越えるためにどうすればいいのか」という事を含めて話します。かつて自分が病気の状態のとき、どんな状態だったのか、それで何をきっかけに薬物やアルコールを断ち切って生きようと決心したのか、これはみんな聞きたがります。「先生、決心はどこでしたんですか、どういうときにしたのですか」。答えは簡単です。死ぬことをあきらめたただけ、自殺行為3回してもダメだった、人間やめたかった、生きようなんて積極的に思った事は無かった。生きられるなんて考えもしなかったですから。物質を断ち切って生きられるなんて思ってもいなかったから、いつもどうでも良かったんです。今は勿論生きてて良かったというのが実感です。私自身は自分の病気の状態をどうのこうのということをお話してくるよりも、「生きる事が出来るよ」と。「どんなにひどい依存症者でもこんなババアになるまで生き延びる事が出来るよ」という事と、後は「一緒にやりましょう（生きて行きましょう）」ということをお話していきます。

とにかく覚せい剤の人は一発打ったら即刻逮捕です。刑務所に入る前、もし入っても、出てきたらどうするのかという間のところでいつも私は待っていたいし見守っていたい、そこで待ってて手を差し伸べたい、という思いでいっぱいです。私自身そうしてもらって今があるのです。元気に生きられているのです。

家族のための連続講座

薬物依存症と家族の対応について(15)

「家族が学ぶべきこと～コントロールしない～」

アパリカウンセラー 町田 政明

家族の人は、どうしても息子や夫を治そうとしますが、治そうとすればとするほど本人の病気は悪化します。治すのを諦めると治る可能性が出てきます。どうしてでしょうか？ コントロールをしないと言う視点から、家族の対応を考えてみたいと思います。

1 本人を支配しない

家族が薬物依存症の本人を支配して行動を制約している間は、本人の回復はありません。家族がコントロールしている間は、さらにコントロールする必要があります。病気が進むと、どんどん本人は自分の事が出来なくなり、赤ちゃん化します。回復とは自立した大人にしないといけません。自分の問題は自分で引き受けるということです。

2 子供を生きがいにしない

親は「困った困った」と言いながら、困るともっと自分が頑張らないといけないうちで、もっとももっと頑張ります。そして気がついたら、自分の事は一切できなくなり、息子を何とかすることばかりの人生になっています。気が付かない間にいつの間にか子供を生きがいにしてコントロールしているのです。

そのようにしてだんだんと息子依存症がひどくなります。もともと息子依存症の気があったと思いますが、薬物の問題でどんどん巻き込まれていきます。

3 頑張らない

あなたは今までよく頑張ってきたのです。自分のことを責める必要はありません。やることはやって充分頑張ってきたと思います。今度は逆に頑張らないことから初めてください。そして、今まで知らなかった依存症という病気を学んで下さい。

4 「親だったら……」を止める

親だったら息子を助けないといけないうちで、この病気は、その気持ちに依存して生きているのです。助けなければいけないうちで、どんどん悪循環の繰り返しで息子の親依存は止まりません。親とか常識、世間体とかいうものを突破しないと、それをかざして、「親ならば・・・」とか「～は世間ではあたりまででしょう」などと言って、コントロールを強めたくなくなります。

5 振り回されない

今まで本人に何回となく振り回されて来たことと思います。なぜならば家族はこの病気を普通の問題や病気と同じく考えて、常識的なこと普通の事をしてきたからです。この病気は常識や普通は通じません。この病気の正体をきちんと学んでこの病気に振り回されないようにしないといけません。家族は常識とか普通を考えて、本人をコントロールして振り回されて来たのです。依存症は世間の常識が通用しないのです。

6 怖れから抜け出す

親だからとか本人に振り回されるのは、犯罪、失職離婚、世間体、一家離散などの怖れがあるからではないでしょうか？ 怖れがあるとそれを何とかしようとしてコントロールしようとして、怖れを取り除かないと、この病気の悪循環からは抜け出すことができません。怖れに対処できるように勉強を続けてください。

7 主体性を取り戻す

いつも息子や夫のことを心配して、何とか家族を維持しようと一生懸命にして生きて来たと思います。しかし、息子のためと思ってすることが、息子を依存させる結果になっていたと思います。息子を治そうと思えば思うほど、うまくいかない病気です。人は変えられませんから、息子をコントロールするのではなく、自分の人生を考えて欲しいのです。

今度は息子や夫ではなく自分を主人公に、私を取戻して欲しいのです。息子や夫ではなく私がどうしたいのか、私を生きるということです。

共依存の人には一番難しいことかもしれません。息子より少ない自分の残りの人生をどう生きたいのか？ 今疎かにしていることはありませんか？ 夫や孫のお世話、近所のお付き合い、趣味など自分のやりたいことがあったらそちらに目を向けて欲しいのです。これで良かったといえる人生を歩んで欲しいと思います。

このように家族が自分に目を向けて勉強すると、本人が初めて自分の問題に向き合えるようになり、回復するチャンスが出来るのです。家族はなかなか自分に目を向けることはできないと思いますが、同じ問題を持った家族の中で同じ苦しみを語る中で、少しずつできるようになります。そして、本人や本人の問題も手放せるようになると思います。

家族の体験記
好評販売中！

『ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
(アパリで販売中)

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「どん底からの出発」

ミッチャン

私が覚せい剤を初めて使ったのは37歳の時です。初めて覚せい剤を買ったのは、私がソーブランドで勤めていた時に同じ職場の仲間が使っていたのを見てしまい、半強制的にすすめられて注射器で打たれたのがきっかけで、鳥肌が立ち心臓がバクバクしたのを覚えています。それ以来覚せい剤にはまり、仕事をしながら1週間に1回のペースで休みをもらい覚せい剤をやり続けました。まだその時は自分が覚せい剤を使っても仕事にも影響が出ないと思っていました。それから1回が2回に覚せい剤を使う様になり、仕事にも行けなくなり、休みがちになりました。最後には職場にバレてクビになりました。その時には自分はお金があったので、これでゆっくりと覚せい剤が出来ると喜びました。でも長くは続きません。お金が底をつき覚せい剤を買うお金もなくなり、覚せい剤がやりたいがために窃盗をしながら覚せい剤をやり続けました。

最後は警察につかまり刑務所に3年行きました。それから自分は刑務所を出て、仕事を探すつもりはなく窃盗をしながら覚せい剤を使い続けました。覚せい剤を使っている時は、今が幸せであればいいという考えでした。でも長くは続きませんでした。また警察に捕まり、その時には覚せい剤ではなく、窃盗だけで2年2カ月刑務所に入りました。平成21年9月21日に刑務所をでて、東京に戻って来たけれど、その時には友人が誰一人として居なくなっていました。その時また懲りずに覚せい剤を使いたくなりました。その時にお金がなくて窃盗をしなければ住む家も無く困っていました。

でも、ここでまた同じことをしたら再度刑務所だと思いました。それから数日が経ち、体調を崩し動けなくなりました。その時にはお金も無く病院にも行けず、ただコインランドリーの椅子に座っている時に初めて自分がみじめだと思い、涙が出てきました。その時に知らない中年の人が来て、タバコを吸いなと渡されました。その時に自分がお金も無く、タバコも無い事を話した後に、その人はコンビニに行こうと言いました。そこでお弁当とタバコを買ってくれました。

その人が福祉に行きなさいと言い、自分はその日に福祉に行き、その日のうちに生活保護が受けられるようになり、平成22年4月26日に日本ダルク アウェイクニングハウスにつながりました。

来たころは自分が駄目な男だと思い、プログラムも頭に入らない生活をしていました。ところが、仲間が自分に新しい生き方を探みなさいと自分に話をするので。その時は自分はわからなかった。でも元気な仲間を見ていると自分も元気にならないと駄目だと思ふようになりました。そこで、筋トレをしている仲間とやってみようと思い、やるようになりました。やっていると、体力もつき日本ダルク アウェイクニングハウスではプログラムの一環で琉球太鼓をやっているのが積極的にやるようになり、少しずつ叩けるようになりました。

自分がどん底から這い上がろうと思ったのは藤岡に来て3カ月位だと思います。初めの頃は、毎日夜になるとなかまと分かち合いをするようになり、自分が今やれることを少しずつやれるようになりましたが、頭の中は覚せい剤のことしかなく毎日妄想をしていました。そこで、仲間が自分に教えてくれました。覚せい剤をもし使ったら最後は刑務所だと自分に言いました。

書籍のご案内！

アパリ発行
「Born・Again
(ボーン・アゲイン)」
体験談 販売中！

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。

アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

下総精神医療センター 第3回薬物乱用対策 研修会のお知らせ

平成23年11月9日(水)～11日(金)、下総精神医療センターで研修会が開かれます。

1日目には理事長近藤恒夫、3日目には監事奥田保弁護士、事務局長尾田真言も講師を務めます。

詳細は、下総精神医療センターのウェブページをご参照ください。申込の締切日は平成23年8月31日です。

<http://www.hosp.go.jp/~simofusa/>

そこで、自分は気付いたのです。また同じことの繰り返しだと思い、そこで今までの生き方だとうまく行かないと思いました。私は日本ダルク アウェイキングハウスに来て、1年2カ月過ぎましたが大勢の仲間と琉球太鼓を習っています。空気の良い環境で過ごしています。私は現在52歳です。



学会のご案内



第17回 法と精神医学国際学会
(International Academy of Law and Mental Health)
2011年7月17日(日)～23日(土)
ドイツ・ベルリン・フンボルト大学

アパリの尾田が筑波大学の森田展彰医師、国立精神・神経医療研究所の松本俊彦医師、群馬ダルクのシヨーン氏らとともに、日本における薬物乱用者の治療と題するセッションに参加します。

また、尾田が「刑事司法制度の各段階にいる薬物依存症者に対するNGOとしてのアパリの介入」と題する報告をします。日本では薬物事犯者対策として厳罰化政策が採用されている反面、長期にわたる身柄拘束期間の中で、現時点では、薬物乱用者のための回復プログラムが実施される時間がきわめて少ないこと。そうした状況の中でNPOアパリが11年前から実施している司法サポート契約の内容等について米国ドラッグ・コート制度と比較して検討する予定です。

URL : <http://www.ialmh.org/template.cgi?content=Berlin2011/main.html>

国際犯罪学会 第16回世界大会
2011年8月5日(金)～9日(火)
神戸国際会議場

約3年に1度開催される国際的な犯罪学会が神戸で開かれます。世界60ヶ国から約1,000名が集まります。

アパリ・ダルクでは、一つのセッションを受け持ち、日本やアジアの薬物事情について語り合います。

報告者：近藤恒夫、尾田真言、三浦陽二、加藤武士、市川岳仁、フィリピン大学レオナルド・エスタシオ准教授、韓国釜国病院チョウ・ソナム先生等が報告します。

主催：日本犯罪関連学会連合会
参加費：一般4万円(当日5万円)

URL : <http://hansha.daishodai.ac.jp/wcon2011/index.html>

DVD発売！！



**「ダメ。ゼッタイ。」だけでは防げない！
青少年に贈る薬物依存者からのメッセージ**

薬物乱用防止啓発視聴資料として、DVDを制作しました。実際に薬物の使用を経験した依存者の体験談を通して、薬物が人に与える影響をわかりやすくご理解いただけます。学校、福祉事務所、児童相談所等でご活用ください。

定価：5,000円 38分
お申込みは日本ダルク本部まで。

：03-3891-9958
FAX：03-3891-9959



パレードのご案内



第2回リカバリー・パレード「回復の祭典」

心の病からの回復～今、ここから～ 10月9日(日)開催決定！

[日時] 平成23年10月9日(日) 10:30～16:00

[場所] 新宿文化センター及び周辺道路

[対象] この運動に賛同するすべての団体・個人

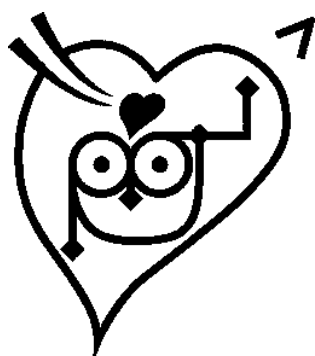
[収容数] パレード、ステージ延べ2,000人 [参加費] 無料(献金をお願いします)

新宿の街をみんなでパレード「歌おう！ 踊ろう！ リカバろう！」

「リカバリー・パレード」とは「アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症や統合失調症・うつなどの心の病、生きづらさ」から回復している本人、家族・友人、関係者、そして一般の賛同者が新宿に集まって「回復」を喜び祝うパレードを行い、一般の人たちに回復の姿をアピールするイベントです。詳細は次号でお知らせします！



昨年の第1回リカバリー・パレードの様子



recoveryparade-japan.com



新宿・甲州街道をパレード



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター
(運営：日本ダルク アウェイキングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

入寮費：月額¥160,000
(初月のみ¥175,000)

*生活保護の方も可能
入寮条件：薬物依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。年齢制限はありません。
入寮期間：個人により差があるので、話し合いながら決めていきます。



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成23年7月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

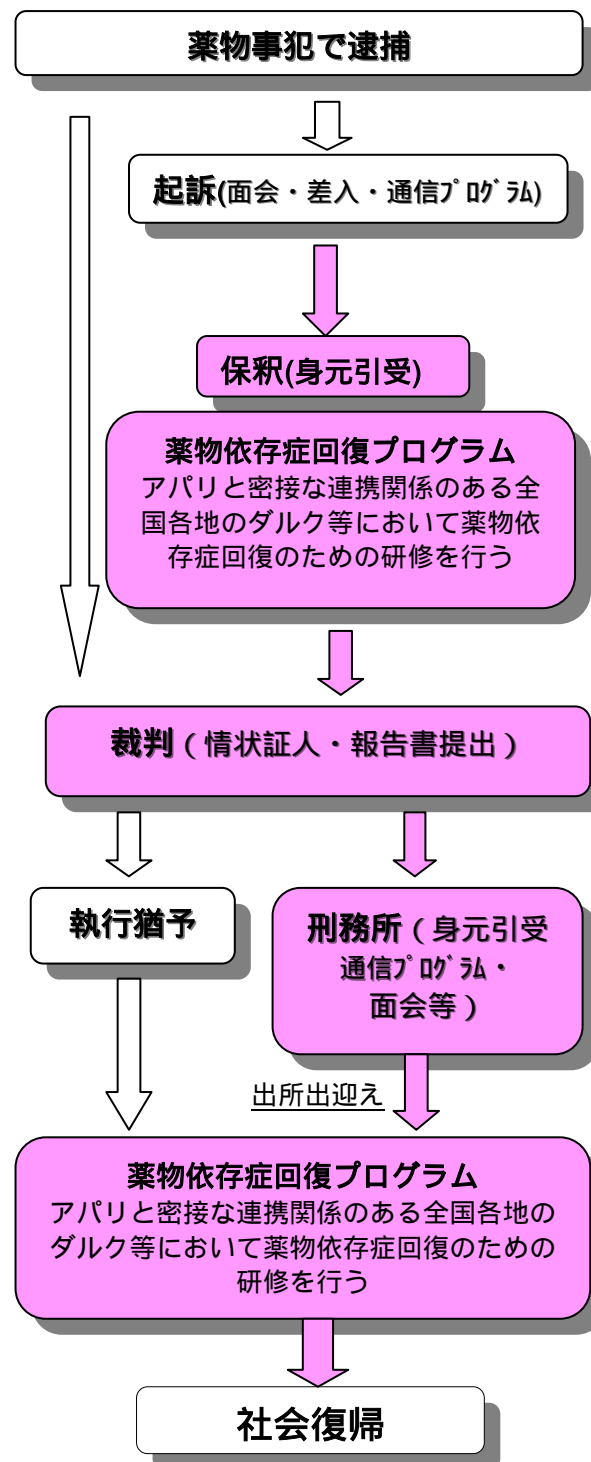
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の司法サポートも行っています。(窃盗、横領、詐欺等)ご相談ください。

[費用:コーディネート契約料として一律20万円。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

[お問合せは東京本部まで]

アパリの支援



<アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
7月4日(月)	囚われからの解放	町田 政明
7月18日(祝月)	お休みします	お休みします
8月1日(月)	共依存について	町田 政明
8月15日(月)	自分を生きる	町田 政明
9月5日(月)	コントロールしない	町田 政明

[対象] 薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者
[日時] 第1・第3月曜日 18:30~20:30(祝日も開催します)
[場所] アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)
[内容] ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。
[予約] 不要です

<個別相談・カウンセリング>

[対象] 薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など
[料金] 45分 9,000円
[場所] アパリ東京本部
[カウンセラー] 町田政明(元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事)
[予約] アパリ東京本部 03-5830-1790